

保育園職員と創る未就学児専用動物観察会の実施事例

○山崎啓・徳武浩司
一般財団法人 沖縄美ら島財団

博物館が生涯学習施設として機能することは、重要な社会的役割の1つとして挙げられ、その達成のためには年齢層や言語等で分かれる多様なニーズに合わせた展示やプログラムを展開する必要がある。中でも未就学児の環境教育は、自らを取り巻く環境と関わり、生命を尊ぶ心の形成の機会として、特に重要視されている。当財団が運営管理する沖縄美ら海水族館でも、未就学児が参加できる動物観察会やバックヤードツアーの要望は多い。一方で、それらプログラムへの未就学児の参加は課題も多く、安全管理と円滑なプログラム進行を優先した場合、受動的な学習になることや他年齢層との混成実施が容易ではないこと等が懸念される。そこで当財団では、これらの未就学児の環境教育への期待と課題を考慮し、未就学児が能動的に学習できるプログラム開発を目的に、未就学児のみを対象とした動物観察会を保育園職員とともに企画し、試行した。本発表では、その教育効果についてアンケート調査結果を中心に報告する。

本観察会では、当館で飼育している小型鯨類やウミガメ類を教材とし、生きものの観察に加え、導入にクイズや実験、観察の振り返りのためのジェスチャーゲームやダンス等を行った。実験では骨伝導を体験し、ダンスの際には、各動物の体の一部(尾鰭や胸鰭)を模したプレートを用い、生きものの疑似体験を多く取り入れた。これらの内容は、幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に沿って構成し、ゲーム難易度や安全面について、保育園職員と事前に相談を重ね、要望を全面的に取り入れた。参加者は3歳児1クラス(児童28名、引率者4名)、4歳児1クラス(児童27名、引率者6名)で、アンケート調査は児童、引率者、保護者と対象別に行った。

児童へのアンケートは観察会の前後に行い、気持ち温度計を用いて生きものの知識と関心の2項目を調査した。結果はいずれも向上しており、特に4歳児の生きものの知識の向上が顕著であった。引率者へのアンケートは先述の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中から7項目(全10項目)を選別し、5段階でその達成度を評価してもらった。結果、半数にあたる5名が最高評価をつけた項目は、「自然との関わり・生命尊重」、「協同性」、「思考力の芽生え」であった。保護者へのアンケートは児童が帰宅後述べていた感想を自由記述してもらった。テキスト型データ分析ソフトを用いて解析した結果、「生きものの形態への関心」「実験やダンス等の楽しさ」「保護者への普及」等の感想が多い傾向が示された。

本観察会について、対象別にアンケートを行ったことにより、児童が能動的に参加し、生きものの観察を通じてそれ自体への興味喚起を促しただけではなく、協同性、思考力を育む機会にもなったことが伺い知ることができた。